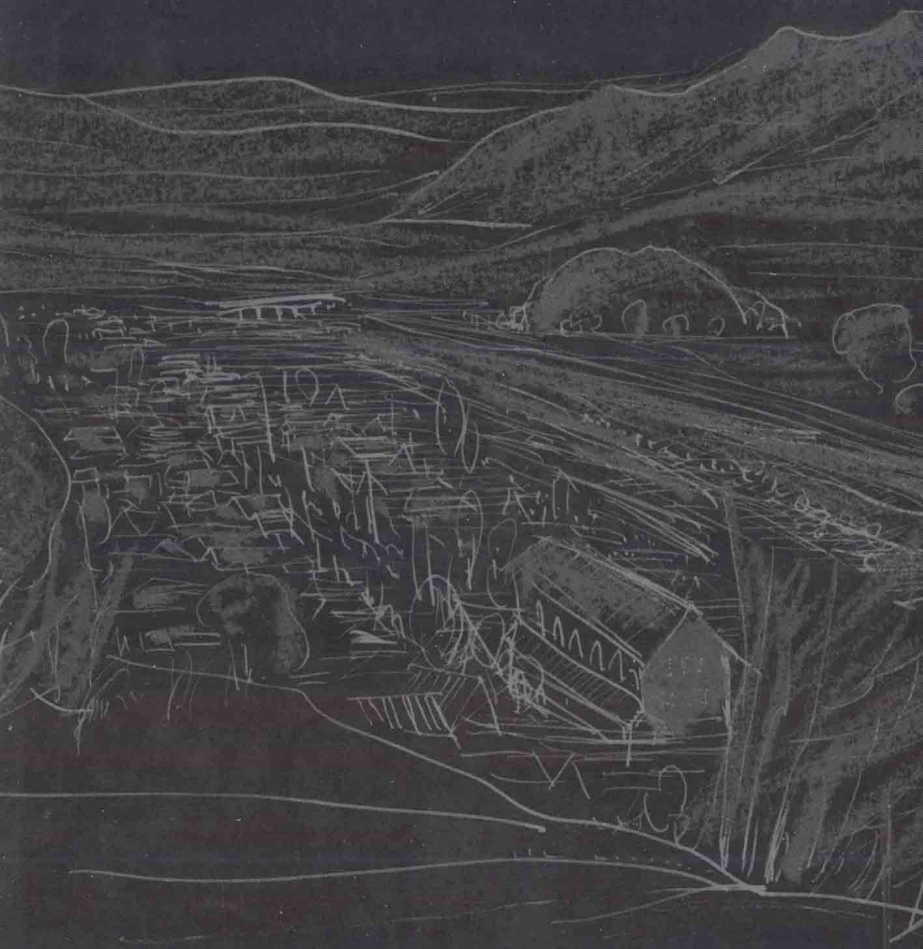
アトラス伝説

井出孫六



冬樹社

アトラス伝説

井出孫六

冬樹社

著者略歴

一九三一年　長野県に生まる
一九五五年　東京大学文学部仏文科卒
一九五八年　中央公論社に入社、雑誌「中央公論」編集部、同出版部に在席
一九六九年　同退社、小説、ルポルタージュなどを書いて現在に至る

著書に『秩父困民党群像』（新人物往来社）がある

アトラス伝説
昭和四十九年十一月二十五日初版第一刷発行
昭和五十年二月二十日初版第四刷発行
著　者　井出孫六
発行者　高橋直良
発行所　冬樹社
東京都千代田区神田神保町二の十八　〒101
電話〇三（二六四）〇三四六　振替東京七七五七
印刷所　三省印刷・三容堂印刷
製本所　凸版印刷株式会社
装幀者　桜井寛
© by Magoroku Ide, 1974. 0063-10212-5160

井出孫六作品集

アトラス伝説

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

目次

非英雄伝……五
『太陽』の葬送……七三
アトラス伝説……一四五

アトラス伝説

非英雄伝

「自分は人から理解されたことがあると、誰が自惚れられようか。我々はみんな識られぬままに去ってゆくのだ」　バルザック

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

(一)

N博士顕彰会の田辺事務長が手配してくれた切符をもって上野駅にかけつけたのは、その夜汽車の発車数分前であった。空席はすでに数えるほどしかなく、選択の余地はなかった。

私のかけた席の隣、窓側には小ざっぱりとした地味な着物の老婆がすでに坐っていた。そして、その息子夫婦とみえる二人が汽車弁とお茶を買ってもってきて、窓ごしに老婆に話しかけていた。「仙台ではもう夜が明けているから、何の心配もない、家には電報を打っておくから安心して眠っていきなさい」という意味のことを夫は東北訛りで老婆に告げている。おそらく、息子夫婦の生活ぶりを見に、はるばる上京した母親の帰郷の見送りでもあろうか、そのサラリーマン風の夫婦の様子には何の変哲もないのだが、場面には何かしら涙をそそるというか、胸を痛めさせるような別れの風情がただよっている。上野の夜汽車は陰気だ。いつも思うのだが、上野という駅の陰うつさは、やはり東北地方という特殊な歴史と風土とからくるストイックな体臭がくり返し塗りこめられた結果できたものであろうか。

この夜汽車で安眠はむりだ。あまり明るくない電灯の下で、私は、鞄につめてきたN博士に関する資料を読み始める。N博士の伝記を書くことになって、半月ほど古本屋や図書館を漁った資料の中で、まだ読みきっていない数冊の書物が鞄の中に収められていた。なにせ、N博士に関する伝記類は普通目につくだけでも十指に余る。手をかえ品をかえて、この人物に関する伝記は出版されてきているのである。そして、こんどもまた、N博士とは何の関係もないこの私が、友人を経由して偶然の依頼をうけて書く破目になったのである。新たに伝記を執筆する必然性は何もない、ただN博士顕彰会に資金があることと、出せば必ず売れるという二つの条件があることだけが理由とみえた。

「ここ数年の統計でも、小・中学生の間で最も読まれているのがN博士の伝記なんです。内容的にはひどいものが多い。本屋も売れさえすればよいので、そんなのが横行しているんです。そういう噴飯物を一掃するためにも、よいものを書いて下さいよ」

気乗りのしなさそうな私を前にして、叱咤するとでもいうように、顕彰会理事長の中川はつづけた。

「生誕八十年を記念して、顕彰会は三部作のN博士に関する伝記を計画している。一つはむろん博士の立志伝。第二は両親、とくに女丈夫といわれたN博士の母堂の刻苦精励の一生。そして第三には、赤貧から博士を見出した恩師T先生の教育者としての生涯。この三部作を出すことが、私の理事長としての最後の仕事だと思ってますからね。ひとつ頑張って下さいよ」

たしかに中川理事長は、この三部作実現に熱心だった。その期待に十分応える自信は私にはない。そもそも私は、英雄偉人の類いには興味がないのだ。まして小・中学生に向けて精神訓話をつくり

あげるお先棒だけはかつぎたくない。しかし、友人を経由しての先方の注文は、無名の若い書き手が欲しいということだという。理由は印税を低くおさえるにあるとしても、無名の若い書き手という条件だけは私にある。

「顕彰会のメンバーというのは、たいていN博士の縁故者か旧い友人・後輩でしてね。いわば動脈硬化にかかっている。これからは、あなたたちの世代で事業をひきついでいってもらわねばならぬのです。昨年だったか、アフリカのガーナが独立して、是非、日本人を招きたい、首府アクラはN博士終焉の地なんで、顕彰会から誰かということになったんだが、老人ばかりで行き手がないんだな」

要するに世代交替というか新陳代謝によって、N博士顕彰の事業を発展させたいというのが、この白髪の理事長の念願となっているのであろう。それにしても、アフリカの新興独立国ガーナ、大統領のエンクルマ、そしてその灼熱の黒い大地には、輝かしい未来が渦巻いているにちがいない。しかもその大地に、いま日本の科学者N博士の黄色い皮膚が灰になって埋められている。むろんガーナの独立と何ら関係のない、一人の日本人の骨なのだが、ガーナの新しい為政者たちは、その日本人の存在に大きな関心をもっているのだ。奇妙に冷えこんでくる古い応接室の固い椅子にかけた私の体に不思議な熱気のようなものが生まれかけている。解けてきた私の表情を、それを書くことへの興味と錯覚してか、老理事長はつづけた。

「N博士については、もうほとんど書き尽されている。それを整理して、集大成すればいいんだ。しかし、私が力を入れたいのは、N博士の恩師T先生という方の伝記というか、その業績の顕彰を

してあげたいということだね。T先生はNさんを実の子同然に扱ったし、NさんはT先生を無二の恩人として終生尊んだ。その美しい師弟愛を語ることは、現今の混乱した教育界にぜひとも必要なんだと思いますよ。これは私の持論なんだが……」

老理事長は、私の関心とは正反対の極にあった。アフリカの小国ガーナの長い長い独立運動のプロセスの中で、独立運動の闘士たちがどれだけ多くの非情の血を流さねばならなかったか、その闘士たちの多くが、小学校の教師たちだということを、私はどこかで読んだ。アフリカの小学校の教師たちは闘うことでしか教えることができなかったのにちがいない。熱帯の激烈な陽光のもと、厚い絶望の壁の一枚一枚を、彼らはどのようにしてはねのけたのであったか。むろん、この老人たちにアフリカの独立を理解する能力を求めることは無理だ。私の中でのN博士のイメージは、一方にふくれ上って実像に近く、他方歪んで貧しくしぼむ虚像と変化する。

幼少の頃、私の勉強机の片隅に十糎たらずの石膏像が置いてあった。私の兄たちによって伝えられたその石膏像は薄汚れたものであったが、ウェーブをした特長ある髪は、まぎれもなくN博士の塑像であった。幸いにも私は、その石膏像に刺激されて医者たらんとするような立志伝中のコースを選ぼうとはしなかった。K社から出たIという伝記作者の少年文庫ものでN博士伝を熱読したけれども、幸い私の手は火傷で不具とはなっていなかった。それこそ、遠い遠い彼方に幾枚ものヴェールをかけられて、それらの虚像は、私の少年の日の思い出の中にしまわれている。いま、私はその遠い過去の虚像にもう一度赤道の太陽のようなまばゆい光をあててみたい妙な衝動にかられていた。

幸い、「若い無名の書き手」という条件がある。この条件には、必然的に、道徳教育徳目の枠をはみ出すような実像を描き出す権利が含まれている、と私は自ら了解した。

「まあ、手初めに、一度あなたも博士の故郷をごらんになるといい。近く三十年忌の法要がある。毎年恒例になってるんですが、今年は例年よりも盛大にやりたいので、その時ご一緒しましょう」

こう言って、中川は事務長の田辺を隣室から呼んだ。法要参列者名簿に私の名を加えさせるためであった。

エンクルマによって触発された私のN博士への興味によって、私はN博士伝の執筆を応諾する破目になったのだ。顕彰会を辞した足で、近くの古書店を何軒か歩いた私は、書架に手垢のついた何冊かのN博士伝を見出した。それらはほとんど戦前に出されたものであった。それと並んで、比較的新しい少年向けのものがあった。それこそ、かつて少年の頃、私が熱読したはずのK社出版になるIのN博士伝改訂版であった。

小学生向けのこの偉人文庫を、あらためて古書店で買い求めるのは、私には半ば照れくさく、半ば懐かしかった。地平線の彼方に横たわる少年の日の胸のときめきがよみがえってきた。

そのIの著す改訂版N博士伝が、いまこの旅の鞄の中に入っている。現地でじかにたしかめるべき数々の事柄がこの著述の中にあるからである。

戦後改訂版の序文を、私は興味深く読んだ。そして今また、車中で私はそれを読み返そうとする。

《この頃、Nが泥鰌売りをして学用品を買ったという話が伝わっている。N博士の伝記にこの話ののっていないのは、殆んどないといってよいだろう。私が前に書いた『N博士伝』にも入れて

ある。これは美しい話である。けれど、あやまった言伝えであることを、私は今度初めて知った。少年は泥鰌売りをしなかった。母にとめられてやめたのではなく、最初からそんなことはしなかった。勿論この町を泥鰌をかついで大声で売り歩いたようなこともなかった》

この伝記作者のIは、同じN博士伝の初版を昭和九年に書いている。満州事変が終り、美濃部達吉が教壇を追われた年。

《その後、私は自分のかいた伝記に不満を持ちました。第一に、いくつかのあやまりがあるために、第二に、伝記を書く上の私の考え方がちがっていたために……》

小学生の私は、純粋な情熱でIの初版本を愛読した。仲間にも貸して、それは数人に回し読みされた。人間というものは、泥鰌売りをしなければ立身出世できぬような錯覚に、私は長い間とらわれていた記憶がある。学校に行かずに靴みがきか、紙芝居屋になろうなどと空想したことも、Iの博士伝に触発されての私の自虐であった。それほどこのエピソードは、この本の中で決定的であったし、感動的に語られていた。そんな事実がなかったなどと夢にも小学生は考えなかったし、まして、大人たちがそれが事実であるかどうかを確かめようとせずに、いい加減に物語を創りあげているなどと空想するはずもなかった。偉人N博士は、不具にめげず、日本人の小軀ものともせず、諸外国の科学者をなで斬りにした英雄だったではないか。

初版、再版、三版と、IのN博士伝は何十万部売れたにちがいない。そして日本の国民にとって不幸な戦争が始まるのである。「聖戦」を戦い抜くためのイデオロギー戦線強化に、この本が何がしかの役を果たしたにちがいない。そして、結果として、その伝記に描かれたN博士もまた太平洋

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com